

日本音声学会 (Phonetic Society of Japan) 大会発表原稿作成の手引

玉田 誠・芳賀 紀行 (山葉大学大学院) Max Biaggi (Suzuki UNIV.)
{tamada, haga}@yamaha.ac.jp, biaggi@suzuki.edu

1 はじめに

これは、2007年度日本音声学会大会発表用の原稿作成方法を記したものです。これに従って原稿を作成して下さい。また、 $\text{\LaTeX} 2_{\epsilon}$ のスタイルファイル使用例も兼ねています。 $\text{\LaTeX} 2_{\epsilon}$ で原稿を作成する方は、是非ご利用下さい。

2 論文作成上の注意

2.1 一般的注意

原稿には、今回発表する内容とその資料を詳しく記述してください。

2.2 注意事項

- 頂いた原稿はそのまま印刷に回しますので、コピーではなく photo ready の原稿をお送りください。
- 図表などは明瞭に描いてください。また、図、表、写真等を貼る場合は、はがれないようにしっかりと貼って下さい。
- 原稿は A4 版ですが、縮小印刷で B5 版になります。
- A4 サイズの用紙に横書きで、ワープロソフト等を使って作成して下さい。
- 1 行 35 字程度、1 ページ 40 行程度、6 ページ以内で作成して下さい (図表を含む)。
- マージン: 天 30mm, 地 35mm, 左右 30mm (必ずお守りください。これより外れると印刷されない可能性がありますのでご注意ください。)
- タイトル、氏名・所属、の間は 1 行あけ、氏名・所属の下も 1 行あけて下さい。著者の所属は括弧付きで書いて下さい。

所属の後に発表者の連絡先 (住所や E-mail address 等) を記載しても結構です。所属先は、 \cdots 大学・学部 / \cdots 大学大学院 \cdots 系研究科等とし役職、課程名や詳しい専攻名等は省略してください (非常勤の場合にも同様に役職名は書かなくて結構です)。

- ページは鉛筆で右下端に記入のこと。後で、通し番号をふります。

2.3 $\text{\LaTeX} 2_{\epsilon}$ 版固有の注意

- ASCII-p $\text{\LaTeX} 2_{\epsilon}$ 専用です。NTT-j \LaTeX 用のスタイルファイルは用意しておりません。御了承下さい。
- 英語のみのファイルをコンパイルする際には別途英文用のスタイルファイルを用意してありますので、そちらをご利用下さい。
- 参考文献の引用形式を「著者 (発表年)」等の形式にするのには、natbib.sty が必要です。最近の tetex ベースのパッケージには同梱されているとは思いますが、自分の環境にインストールされていない場合には、インストールしておいて下さい。

表 1: 表のサンプル

| | 得点 (平均) | 反応時間 (秒) |
|--------|----------|----------|
| グループ A | 128.002 | 1.005 |
| グループ B | 98.320 | 1.224 |
| グループ C | -137.204 | 1.337 |

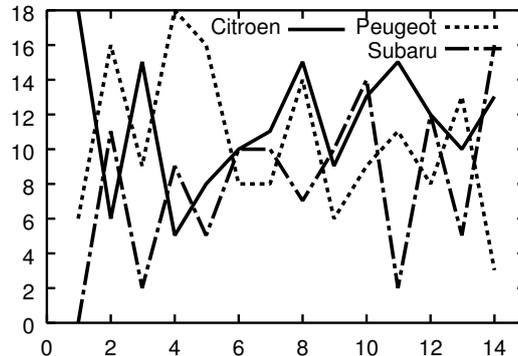


図 1: 図のサンプル

- natbib.sty を用いると、「\cite{label}」で、「小松 (1981)」や「Ladd (1984)」のように出力します。また、「\citep{label}」で「(大野・久野・杉村・久野, 2000)」のように出力します。
- 著者 (発表年) 形式で引用する場合には, bibliographystyle には付属の psjcite.bst を指定した上, スタイルファイルに natbib.sty および psjcite.sty を組み込んで下さい。

3 実例

従来, 吉野家においては「大盛つゆだく」が主流とされていた。しかし, 本当は「つゆだく」を食べたくないにも関わらず「つゆだく」と言いたいだけで「つゆだく」を注文する客が増えたため, 最近は流行らなくなってきている。代わりに, 最近では「大盛りねぎだくギョク」が通の頼み方であるとされている。「ねぎだく」とは, ねぎが多めに入っている代わりに肉が少ないというものである。この「ねぎだく」に玉子をつけるのが最強とされる (NotFound, 2001)。

4 結論

以上見てきたように「大盛りねぎだくギョク」は最新の流行であり, 最強であることが分かった。ただし, これを頼むと次から店員にマークされる危険性も指摘されている。よって初心者は, 牛鮭定食を食すのがよいだろう。

参考文献

- 小松 英雄 (1981) 『日本語の音韻』東京: 中央公論社.
- Ladd, R. D. (1984) “English compound stress.” In D. Gibbon & H. Richter (Eds.), *Intonation, accent and rhythm*. (pp. 253–266). Berlin: de Gruyeter.
- NotFound, S. (2001) *Not found’s web diary*. Tokyo: Sarusaru Nikki.
- 大野 眞男・久野 眞・杉村 孝夫・久野 マリ子 (2000) 「南琉球方言の中舌母音の音声実質」 『音声研究』4: 1, 28–35.